2026年度 第6回（11月）北辰テスト対策 予想問題

国語（制限時間 50分・100点満点）

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（28点）

中学三年生の「ぼく」（湊）の祖父は、町に一軒だけ残った和紙の工房で、紙すきを続けている。高校受験をひかえた十一月、湊は母に頼まれて、腰を痛めた祖父の手伝いに、放課後、工房へ通うことになった。

工房の戸を開けると、冷たい水のにおいがした。祖父は、すき舟と呼ばれる大きな水槽の前に立ち、木の枠を両手で持って、白くにごった水を静かにすくい上げていた。前後に、左右に。枠がゆれるたびに、水の中の細い繊維が、少しずつ一枚の紙の形に重なっていく。

「来たか。そこの板に、すいた紙を並べてくれ。」祖父は、ぼくのほうを見ずにそう言った。

正直に言えば、ぼくは乗り気ではなかった。この前の模試の結果は思ったほどよくなかったし、机に向かう時間は一分でも惜しい。それに、①和紙なんて、今は店に行けば、機械で作った紙がいくらでも安く買えるのに、という気持ちが、心のどこかにあった。

三日目の夕方、祖父が腰をさすりながら、「湊、少しすいてみるか。」と言った。

ぼくは、見よう見まねで枠を構えた。ところが、水をすくった瞬間、腕にずしりと重みがかかり、思わず枠をかたむけてしまった。できあがった紙は、片側だけが厚く、もう片側は向こうがすけて見えるほど薄かった。

「やっぱり、ぼくには無理だよ。」そう言って枠を置こうとすると、祖父は、ぼくのすいた紙を窓の光にかざした。

「悪くない。わしが最初にすいた紙より、ずっとましだ。」

祖父が初めて紙をすいたのは、十五歳のときだったという。父親にしかられながら、何百枚も失敗した。「手が覚えるまでは、頭で考えたってだめなんだ。水の重さも、繊維の動きも、毎日さわっているうちに、手のほうが先にわかるようになる。」

祖父は、ぼくの後ろに回ると、枠を持つぼくの手に、自分の手を重ねた。祖父の手は、ごつごつしていて、驚くほど冷たかった。何十年も、冬の冷たい水に入れ続けてきた手だ。②その手に導かれて枠をゆらすと、水の中の繊維が、さっきとはまるで違う動きで、静かに枠の上に広がっていった。

「この工房の紙はな、町の小学校の卒業証書に使われているんだ。湊のも、そうだったろう。」

ぼくは、はっとした。三年近く前の春、体育館で受け取った卒業証書。ざらりとした手ざわりと、光にすかすと見えた細かな繊維の模様を、ぼくは今でも覚えている。あの紙も、祖父のこの手がすいたものだったのだ。

「機械の紙は、どれも同じだ。それはそれで便利なもんだ。だが、手ですいた紙には、すいた者の手の具合が、ちゃんと残る。そういう紙を、毎年だれかが、一生に一度の日に受け取る。だから、やめられんのだ。」

祖父はそう言って、少し照れたように笑った。③ぼくには、板の上に並んだ白い紙が、さっきまでとは違って見えた。

その日の帰り道、ぼくは、自分の両手を何度も見た。指先は赤くなり、まだじんじんと冷たかった。家に着いたら、模試の復習をしよう。そして、土曜日にはまた工房へ行こう。④受験が終わったら、来年の卒業証書の紙を、一枚でいいから、自分の手ですいてみたい。ぼくは、冷えた指先を、ポケットの中で強くにぎった。

（注）すき舟……紙すきに使う、紙の原料をとかした水を入れておく大きな水槽。　枠……細い竹などを編んだすだれをはめた木の道具。これで水をすくい、ゆらして紙の層をつくる。

問1 ①「和紙なんて、今は店に行けば、機械で作った紙がいくらでも安く買えるのに」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちを説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（4点）

ア腰を痛めた祖父のことが心配で、自分が手伝わなければ工房がつぶれてしまうと、強い責任を感じている。

イ受験勉強の時間が惜しいうえに、手ですいた和紙にわざわざ作るほどの値打ちがあるとは思えず、手伝いに気が進まないでいる。

ウ紙すきの技術を早く身につけて、祖父を驚かせたいと張り切っている。

エ母に手伝いを頼まれたことに腹を立て、祖父とは口をきかないでおこうと決めている。

問2 祖父は、紙すきを身につけるには、どうなることが大切だと考えていますか。次の文の空欄にあてはまる言葉を、本文中から五字で抜き出して書きなさい。（4点）

「水の重さや繊維の動きは、［　　五字　　］までは、頭で考えてもわからない。」

問3 ②「その手に導かれて枠をゆらすと、水の中の繊維が、さっきとはまるで違う動きで、静かに枠の上に広がっていった」とありますが、この表現から読み取れることとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（4点）

ア祖父の手の冷たさに驚き、紙すきは自分には向いていないと、改めて思い知らされたこと。

イ祖父が、湊の手を借りることで、自分の腰の痛みを湊に気づかれないようにしていること。

ウ祖父の手を借りなくても、湊が一人で上手に紙をすけるようになったこと。

エ長年冷たい水にふれ続けてきた祖父の手に導かれ、言葉では伝わらない紙すきの感覚を、初めて自分の手で感じ取ったこと。

問4 ③「ぼくには、板の上に並んだ白い紙が、さっきまでとは違って見えた」とありますが、それはなぜですか。次のようにまとめるとき、空欄にあてはまる内容を、手、卒業証書の二つの言葉を使って、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。（6点）

「機械で作った紙と変わらないと思っていた和紙が、［　　25字～35字　　］ものだとわかったから。」

問5 ④「受験が終わったら、来年の卒業証書の紙を、一枚でいいから、自分の手ですいてみたい」とありますが、このときの「ぼく」の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（5点）

ア受験勉強がいやになり、高校へは進まずに、すぐにでも祖父の工房を継ごうと決心している。

イ祖父にほめられて得意になり、来年には祖父よりも上手に紙をすけると自信を持っている。

ウ祖父の紙すきが、卒業証書として人々の大切な日を支えてきたことを知り、自分もその仕事に少しでもかかわってみたいと思い始めている。

エ手伝いのせいで勉強の時間が減ったことを悔やみ、早く受験を終わらせて自由になりたいと思っている。

問6 本文の内容や表現について述べた文として適切なものを、次のア～オの中から二つ選び、その記号を答えなさい。（5点）

ア「前後に、左右に。」のように短く区切った表現を用いて、祖父が枠をゆらす動きを印象づけている。

イ物語は祖父の視点から語られており、祖父の心の中の思いが、地の文で直接説明されている。

ウ三年前の卒業式の記憶を思い出す場面をはさむことで、和紙が「ぼく」自身ともつながっていることに気づく様子を描いている。

エ季節を表す言葉を多く用いて、真夏の工房の暑さを強調している。

オ会話文を一つも用いず、地の文だけで祖父と「ぼく」のやりとりを描いている。

2

問1⑴ 次の――部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。（各2点）

声に抑揚をつけて詩を朗読する。（読み）

問1⑵（各2点） 長い時間をかけて、仲間との信頼を培う。（読み）

問1⑶（各2点） 発表の要点をカンケツにまとめる。（書き）

問1⑷（各2点） 説明の足りないところを、図でオギナう。（書き）

問2⑴・⑵ 次の⑴・⑵の――部のかたかなを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとのア～エの中からそれぞれ一つ選び、その記号を答えなさい。（各2点）

試合の結果をノートにキロクする。

ア明日の天キ予報を見る。

イ夏休みの日キを書く。

ウ学校のキ則を守る。

エキ節の変わり目に体調をくずす。

問2⑵（2点）委員会で、新しい企画をテイアンする。

ア言葉づかいをテイネイにする。

イ家テイ科の授業で料理を作る。

ウ電車が駅にテイシャする。

エ宿題を先生にテイシュツする。

問3 次の文の――部A～Fについて説明した文として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（3点）

静かな（A）部屋で　小さな（B）声で　話す（C）祖母の　言葉は、とても（D）やさしく（E）温かだ（F）。

ア用言はA・B・C・E・Fの五つで、そのうち形容動詞はA・B・Fの三つである。

イ用言はC・E・Fの三つで、そのうち形容動詞はFの一つである。

ウ用言はA・C・E・Fの四つで、そのうち形容動詞はA・Fの二つである。

エ用言はA・C・E・Fの四つで、そのうち形容動詞はA・E・Fの三つである。

問4 次の文を文節に区切ったときの文節の数と、単語に区切ったときの単語の数の組み合わせとして最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（3点）

弟が毎朝庭の花に水をやっている。

ア文節　六　単語　十一

イ文節　六　単語　十二

ウ文節　七　単語　十一

エ文節　七　単語　十二

問5 次の文の――部の動詞と同じく、自動詞であるものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（3点）

強い風で、看板が倒れる。

ア旅行の間、犬を友人に預ける。

イ電車が駅に止まる。

ウ帰る前に、教室を片づける。

エ話し合いで、次の目標を決める。

問6 次のア～エの短歌の中から、四句切れのものを一つ選び、その記号を答えなさい。（3点）

ア ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく　石川啄木

イ 清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき　与謝野晶子

ウ 東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる　石川啄木

エ 幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく　若山牧水

問7⑴三年一組の国語の授業では、「地域の行事に参加して」という題で書いた作文を、班で読み合っています。次の【作文の一部】と【話し合いの様子】を読み、あとの⑴・⑵に答えなさい。

【作文の一部】（山本さんの作文）

十月の終わりに、地域の防災訓練に参加した。訓練の日が①ちかずくにつれて、ぼくは少し面倒だと感じていた。しかし、当日の会場には、②以外にも、小学生や高齢の方が③おおぜい集まっていた。消防団の方の説明を聞いて、ぼくは、防災に④関心を持つことの大切さを知った。参加して、とても大切だと思った。

【話し合いの様子】

田中（司会）「山本さんの作文について、意見を出し合いましょう。」

石井「訓練の様子はよくわかりました。ただ、最後の『参加して、とても大切だと思った』だけでは、山本さんが何に気づいたのかが伝わりにくいと思います。消防団の方の話で、心に残った言葉はありませんでしたか。」

山本「『訓練でできないことは、本番でもできない』という言葉が、心に残っています。」

石井「その言葉と、そこから考えたことを最後に書くと、山本さんの気づきがはっきりすると思います。」

田中「では、最後に、消防団の方の言葉と、そこから考えたことを書き加えることにしましょう。それから、漢字や仮名遣いの誤りも確かめておきましょう。」

⑴【作文の一部】の――部①～④には、漢字の誤りが一つ、仮名遣いの誤りが一つあります。それらを正しく直したものの組み合わせとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（2点）

ア①を「ちかづく」に、③を「おうぜい」に直す。
イ①を「ちかづく」に、②を「意外」に直す。
ウ②を「意外」に、④を「感心」に直す。
エ③を「おうぜい」に、④を「感心」に直す。

問7⑵この話し合いで、石井さんはどのような役割を果たしていますか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（2点）

ア作文の伝わりにくい点を指摘したうえで、質問をして山本さんから材料を引き出し、具体的な直し方を提案している。
イ出された意見を整理し、作文をどのように直すかを最終的に決めている。
ウ山本さんの作文にある漢字や仮名遣いの誤りを、一つ一つ指摘している。
エ山本さんの作文の題材に反対し、別の行事について書き直すように求めている。

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（28点）

植物図鑑を開くと、写真ではなく、細かな線で描かれた絵が使われていることがある。写真を撮れば一瞬で正確な姿を残せる時代に、なぜ、わざわざ時間をかけて絵を描くのだろうか。

写真は、レンズの前にあるものを、すべて同じように写しとる。葉の上の小さな傷も、たまたま重なった別の草も、背景の土も、区別なく画面に入りこむ。①そのため、写真は正確でありなが

ら、かえって見る人を迷わせることがある。どこを見ればその植物の特徴がわかるのかを、写真は教えてくれないからである。

これに対して、図鑑の絵を描く人は、何十もの株を見比べたうえで、その種類に共通する葉の形や、花びらの数、茎の毛の生え方などを選び出して描く。たまたまついた傷や、ほかの草は描かない。つまり、絵は、描く人が「これがこの植物だ」と判断したものだけでできているのである。

ここから、②描くということは、見えているものを写すことではなく、何を残し、何を省くかを選ぶことだと言える。そして、選ぶためには、何よりもまず、対象をじっくりと見つめる時間が必要になる。描く人は、手を動かす前に、見ることに多くの時間を使っているのである。

省くことの力は、図鑑の絵に限らない。墨一色で描かれる水墨画には、紙の白いままの部分が大きく残されていることが多い。何も描かれていないその部分は、見る人によって、あるときは霧に、あるときは水面や広い空に見えてくる。描かれていないからこそ、見る人は、自分の経験や記憶を手がかりに、そこを満たそうとする。③余白は、作品と見る人とをつなぐ場所なのである。

すべてを描きこんだ作品は、たしかに多くのことを教えてくれる。しかし、見る人が入りこむすきまがなければ、人はそれを受け取るだけで終わってしまう。反対に、作者が大胆に省いた作品の前では、見る人は自分で考え、想像し、作品の最後の仕上げに加わることになる。

わたしたちは、表現というと、何かを付け加えていくことだと考えがちである。しかし、④本当に伝えたいことをはっきりさせるのは、むしろ、何かを省くことなのかもしれない。何を描かないかを決めることは、何を大切にするかを決めることでもあるからだ。

作品を見るとき、描かれているものだけでなく、描かれていない部分にも目を向けてみるとよい。そこには、作者が何を選び、何を伝えようとしたのかを知る手がかりが残されているはずである。

（注）株……根のついた、一本一本の植物。　水墨画……墨の濃いうすいだけで描く絵。

問1 ①「そのため、写真は正確でありながら、かえって見る人を迷わせることがある」とありますが、筆者がこのように述べるのはなぜですか。その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（4点）

ア写真は、撮る人によって色や明るさが変わってしまい、植物の本当の姿を正確に写すことができないから。

イ写真は、撮るのに時間がかかるので、見る人が待ちきれなくなってしまうから。

ウ写真は、絵よりも小さく印刷されることが多いので、細かな部分が見えにくいから。

エ写真は、植物の特徴も、たまたま写りこんだ傷やほかの草も区別なく写すので、どこを見ればよいかがわからないから。

問2 ②「描くということは、見えているものを写すことではなく、何を残し、何を省くかを選ぶことだ」とありますが、筆者は、選ぶためには何が必要だと述べていますか。次の文の空欄にあてはまる言葉を、本文中から十四字で抜き出して書きなさい。（4点）

「描く人には、手を動かす前に、［　　十四字　　］が必要である。」

問3 ③「余白は、作品と見る人とをつなぐ場所なのである」とありますが、筆者がこのように述べるのはなぜですか。次のようにまとめるとき、空欄にあてはまる内容を、想像、仕上げの二つの言葉を使って、三十字以上、四十字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。（6点）

「何も描かれていない余白では、［　30字～40字　］から。」

問4 ④「本当に伝えたいことをはっきりさせるのは、むしろ、何かを省くことなのかもしれない」とありますが、筆者がこのように考えるのはなぜですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（5点）

ア作品にできるだけ多くのことを描きこめば、見る人が迷わずに、作者の伝えたいことをそのまま受け取れるから。

イ何を描かないかを決めることは、何を大切にするかを決めることであり、省くことで作者が伝えたいことが際立つから。

ウ省けば描く手間が少なくなるので、短い時間でたくさんの作品を仕上げることができるから。

エ写真は何も省かずに写すので、表現としては、いつでも絵よりも劣っているから。

問5 「省くことの力は、図鑑の絵に限らない。」で始まる段落の働きを説明したものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（4点）

ア図鑑の絵の例で述べた「省く」ことの働きを水墨画の例へと広げ、作品と見る人とのかかわりという新しい観点を加えている。

イ前の段落までの内容を否定し、省くことには大きな欠点があることを述べている。

ウ水墨画の歴史をくわしく説明し、図鑑の絵との違いを数字を用いて示している。

エ本文全体の結論を最初に示し、そのあとの段落で、それを裏づける具体例を挙げている。

問6 本文の内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（5点）

ア写真は一瞬で正確な姿を残せるので、これからの植物図鑑には、絵を使う必要はなくなっていく。

イ水墨画に白い部分が残されているのは、墨や紙を節約するためである。

ウ描くことは、何を残し何を省くかを選ぶことであり、省かれた部分は見る人の想像を引き出して、作品と見る人とをつなぐ。

エ作品は作者が一人で完成させるものなので、見る人は作者の考えをそのまま受け取るべきである。

4　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（16点）

次の文章は、鎌倉時代の説話集『十訓抄』の一節です。小式部内侍は、すぐれた歌人として名高い和泉式部の娘で、若いころから歌の才能を知られていましたが、「母に代わりに詠んでもらっているのではないか」とうわさする人もいました。

和泉式部、保昌が妻にて丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるに、小式部内侍、歌詠みにとられてア詠みけるを、定頼中納言①たはぶれて、小式部内侍、局にありけるに、②「丹後へ遣はしける人は参りたるや。いかに心もとなく思すらん。」と言ひて、局の前をイ過ぎられけるを、御簾より半らばかり出でて、わづかに直衣の袖をウひかへて、

大江山いくのの道の遠ければまだふみもみず天の橋立

とエ詠みかけけり。思はずにあさましくて、「こはいかに、かかるやうやはある。」とばかり言ひて、返しにも及ばず、袖を引き放ちて逃げられけり。小式部、これより歌詠みの世におぼえ出で来にけり。

（『十訓抄』による）

（注）和泉式部、保昌が妻にて丹後に下りけるほどに……和泉式部が、夫の藤原保昌とともに丹後の国（今の京都府北部）に下っていたころに。歌合……歌を詠み比べる催し。歌詠みにとられて……歌を詠む人に選ばれて。定頼中納言……藤原定頼。中納言は官職の名。たはぶれて……からかって。局……宮中で、仕える女性に与えられた部屋。丹後へ遣はしける人は参りたるや……（母に歌を頼むために）丹後へつかわした使いの人は、もどって参りましたか。心もとなく思すらん……気がかりにお思いでしょう。御簾……部屋の内と外とを仕切るすだれ。半らばかり……半分ほど。直衣……貴族の男性のふだん着。ひかへて……引きとめて。大江山・いくの（生野）・天の橋立……京から丹後へ向かう道すじの地名。「いくの」には「行く」の意味もかけている。ふみ……「踏み」（足をふみ入れる）と「文」（手紙）の二つの意味をかけている。思はずに……思いがけないことで。あさましくて……おどろきあきれて。こはいかに、かかるやうやはある……これはどうしたことだ、こんなことがあるものか。返しにも及ばず……返事の歌を詠むこともできず。おぼえ出で来にけり……評判が高まった。

問1 ①「たはぶれて」を、現代仮名遣いに直して、すべてひらがなで書きなさい。（4点）

問2 ②「丹後へ遣はしける人は参りたるや。いかに心もとなく思すらん。」は、だれの言葉ですか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。（4点）

ア和泉式部
イ藤原保昌
ウ小式部内侍
エ定頼中納言

問3 ――部ア～エの中から、主語が他と異なるものを一つ選び、その記号を答えなさい。（4点）

ア詠みける
イ過ぎられける
ウひかへて
エ詠みかけけり

問4 小式部内侍は、「大江山いくのの道の遠ければまだふみもみず天の橋立」という和歌で、定頼中納言に何を伝えましたか。次のようにまとめるとき、空欄にあてはまる内容を、現代語で十字以上、二十字以内で書きなさい。（4点）

「母のいる丹後は遠いので、［　10字～20字　］と言い返し、歌を自分の力で詠んだことを示した。」

（以上で問題は終わりです。）